えこまち活動の一層の推進を

えこまち推進協議会総会

てしかがえこまち推進協議会（会長・徳永町長）は5月15日、町公民館で総会を開き、平成22年度事業決算報告、平成23年度事業計画を承認しました。

総会には会員約40人と、来賓として招かれた北海道釧路総合振興局柴田達夫局長、町議会八幡豊行議長、同小川義雄総務経済常任委員長、海島遊民くらぶの江崎貴久代表、北海道運輸局長谷川巧課長補佐が出席しました。

徳永会長は冒頭「関係者の皆さんのこれまでのさまざまな取り組みに感謝している」とした上で「震災で地域経済は深刻な状況である。みんなが一緒になって今後の観光地域づくりをしっかりと進めてまいりたい」と挨拶しました。

引き続き、来賓としてお祝いに駆けつけた、釧路総合振興局の柴田局長は「協議会で取り組んでいる、地域の資源を磨き、再認識する観光の町づくりを、このまま継続してほしい」と祝辞を述べ、八幡町議会議長は「皆さんの取り組みにより、町の観光振興に良い影響が出てきている。今後の取り組みに期待している」と述べました。

総会で挨拶をする柴田局長

昨年度の事業報告では、観光地域づくりのけん引役と地域経済に貢献すべく、新たな発展や可能性を追求しながら、社会に誇れる「総合産業」としての観光の確立を図るため、さまざまな事業に取り組んできたとして「エコツアーガイド養成講習会」をはじめとする50以上にわたる各種事業実施や、80回を超える各専門部会の開催状況が報告されました。

また新年度に向け、昨年度末に発生した東日本大震災による地域への多大な影響が予想される中、各専門部会はもちろん構成団体との連携強化を促進するとともに、協議会活動の活性化を図り「誰もが自慢し、誰もが誇れる町」を目指し、本町観光振興のさらなる活性化を図るための事業に取り組むとしています。

平成23年度新規事業としては、昨年度からの継続事業などを主体とした「てしかがスタイルエコツーリズム基本方針の検討」「（仮）弟子屈百景」「ソフトバンクとの連携事業の「ふらっと案内」や「てしかがえこまち新聞発行事業」などの事業計画を報告。これらの予算案など、事務局が専門部会長会議や役員会を経て提案した各議案について審議し、全ての議案を全会一致で承認しました。

みんなが良くなる仕組みがエコツーリズム

江崎貴久さんが講演

三重県鳥羽市からの講師 江崎貴久さん

総会後の講演会では、三重県のエコツアー会社「海島遊民くらぶ」代表の江崎貴久さんが「エコツーリズムによる地域づくり」のテーマで講演。町民など約70人が参加しました。

江崎さんは旅館の女将をする傍ら、エコツアーガイドとしても活躍。NPO法人日本エコツーリズム協会「このガイドさんに会いたい100人」環境省「エコツーリズム大賞・優秀賞」などを受賞するなど、日本のエコツーリズムのけん引役として注目されています。

江崎さんはエコツーリズムについて「一人では何もできないので、地域のみんなに頼ってやってきた。だからこそ、今では地域のみんなから頼られるようになった」と話し、自ら地域で実施した経済効果の調査結果を見せながら「いい人が増えると町の景気が良くなる。みんなが経済的にも精神的にも良くなれる仕組みがエコツーリズムだと思います」と説きました。

引き続き行われた公開ディスカッションでは、町の観光アドバイザー・山田桂一郎さんがコーディネーターを務め、徳永会長、柴田局長、江崎さん、長谷川課長補佐が登壇。「弟子屈町の観光の現状と今後の展望」をテーマに議論しました。

初めに徳永会長は「観光の現状は非常に厳しい」としながら「この協議会を通じてさらに観光が大きく飛躍していくことを祈念している」と、協議会の取り組みに対して期待感を示しました。

柴田局長は「何を地域の誇りとするのか。モノではなく自然保護やライフスタイル自体である」とアドバイス。江崎さんは「例えば旅行商品などでも、つくったことに満足してしまうことがよくあるが、お客さんに満足されなければいけない」、長谷川課長補佐は「さまざまな課題は承知しているが、観光での北海道の成功事例となることを期待し、応援していきたい」と話しました。

最後に山田さんは「今後の協議会の活動も、さらに多くの皆さんにご協力をいただかなければならない」と、町が一丸となっての観光振興の必要性を説き、終了しました。

公開ディスカッションには約70人が参加

いつも聞こえるみんなの声

タウンメール

町のみんなのコミュニケーション

あなたの町政に対する 意見・要望・質問やさまざまな情報をお寄せください

町民課町民相談係では、町民のみなさんの声を広く町政に反映させる公聴活動として「タウンメール」を実施しています。

この「タウンメール」は、町民のみなさんの町政に対する意見・要望・質問などを記入していただき、最寄りの郵便ポストへ投函していただくというものです。

地域づくりや町づくりなどに関する意見・要望のほか、行政への疑問や情報提供など、あなたが知りたいことや知らせたいことも大歓迎です。お気軽にあなたの声をお聞かせください。みなさんの声が明日の弟子屈町をつくります。

寄せられた声に対しての回答は広報紙への掲載、または、ご本人へ直接通知します。回答につきましては封書を投函していただいた時期により、翌々月の広報紙に掲載となる場合もあるほか、内容によっては回答しかねる場合もありますのでご了承願います。

また、匿名の方についての回答は、いたしかねます。

記入の仕方

- ＊ 町づくりなどに関する意見・要望のほか、行政への疑問や情報提供などのあなたが知りたいことや知らせたいことも、ご自由にお書きください。
- ＊ 中傷や営利を目的とした内容はご遠慮願います。
- ＊ 封書は点線にそって切り、折ってノリ付けし、切手を貼らずにそのままポストへお入れください。
- ＊ この封書の差出有効期限は平成24年3月31日ですので、それまでにお出しください。
- ＊ 内容によってはこちらから内容確認を行うことや、直接回答を行う場合などがありますので、**住所・氏名・性別・年齢・電話番号は必ず記入してください。**なお、広報紙に掲載する場合、氏名は公表いたしません。

◆お問い合わせ先／役場町民課町民相談係　☎482－2934（課直通）

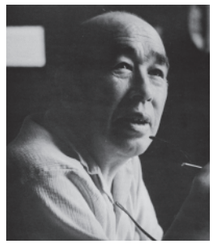
あなたの声をお気軽にお寄せください

いつも聞こえるみんなの声 タウンメール

ご住所			
お名前			
電話番号			
年齢		性別	男・女

キリトリ線　折り線　谷折り　のりしろ

原野紀行



更科源藏(さらしなげんぞう)
●1904(明治37)年、弟子屈町熊牛原野(南弟子屈)に生まれ、1985(昭和60)年に81歳で逝去。東京麻布獣医学校を中退した後、尾崎喜八、高村光太郎に師事し、詩作を中心に郷土史、アイヌ文化研究など主に文学活動を続けた。
▶弟子屈町で所蔵しているさまざまな資料を紹介する。

著書の検印などに使っていた自作のエゾシカ印

詩誌『野生』

太平洋戦争中、北海道農業会に勤務していた更科は、東京で戦災に遭った人たちを北海道へ疎開させ、農業移住する人たちを世話するために出掛けていました。移住する人たちと北海道に戻る途中、大東亜戦争(太平洋戦争)終結の「詔書奉読」を、青函連絡船の船上で聞きます。

戦争が終わり、軍部による言論への圧力から解放されると、それまで口を閉ざしていた文人や論客が一斉に、戦争に協力する文章を発表していた文人や詩人を非難し出しました。

更科も、1943(昭和18)年に刊行した詩集『凍原の歌』に、戦地で戦う軍人を題材にした詩を掲載していたことから攻撃されました。浴びせられる罵声にじっと耐えていた更科は、終戦の半年後(1946(昭和21)年)の2月に、詩誌『野生』を編集し発行します。

創刊号の巻頭に「詩人にして祖国を愛さなかった者があらうか、戦争前も戦争中も又終戦後も吾々は皆愛国者であった、…戦争の目的が、戦争指導者の真意は別として、大東亜の建設と祖国の自衛といふ、たゞそれを真向から信じ…彼等(戦争指導者―筆者注)の醜い野心を成長させ、欺瞞をゆるしたのは誰でもない又吾々ではなかったか、それは文化のひくさの表れではなかったか…戦火にも焼けず、爆撃にも破壊されなかった詩精神の発見と真に美しい力あふれる祖国建設を夢見て各々の詩業を献じやう…」(署名はありませんが更科と思われます)と、創刊のことばを書いています。

この詩誌には、更科と気持ちを同じくする詩人たちや、戦争中に傷痍軍人療養所で更科の文学指導で心の傷を癒やされていた若者たちが集まります。更科は「早急で自分乍らあきれるほ〇(一字不明)不体裁な編輯をしてしまった…」とぼやきます。しかし戦争が終わり、それまで抑え付けられていた全てが、これからは自由に表現できる時代が来た喜びを感じています。

詩誌『野生』は、その後編集者を代え、戦後からある程度落ち着いた時代を迎えた1959(昭和34)年「脆弱だった戦前の知性への反省」とした詩誌創刊の目的を成し遂げ、第26号で終刊しました。

キリトリ線
折り線
料金受取人払郵便
釧路支店承認
1073
差出有効期間
平成24年3月
31日まで
(切手不要)
0888-3292
弟子屈町役場
町民課町民相談係行
山折り
キリトリ線